

現代人のソーシャルリテラシー

コミュニケーション力とツールの影響

大坊 郁夫



Daibo Kyo

だいほういুকお／社会心理学者。北星学園大学教授、大阪大学大学院人間科学研究科教授などを経て、東京未来大学学長。対人コミュニケーションが専門。著書に『幸福を目指す対人社会心理学』（共著）、「しぐさのロマンティックシム」など。

2つの「社会」

まず、社会心理学的には、「社会」といったときに、大きく分けて2つの捉え方があることから考察を始めよう。例えば、「我々が今住んでいる社会」と表現する場合、日本社会とか、アジア社会といったものなどが考えられるが、こうした社会は、私たち個人の外にあって、その中には自分自身やほかの人も含めた対人関係や、集団や企業、環境や各種の構造などのすべてが含まれている。この大きな容れ物が社会だという捉え方である。この場合、その社会の像は個人にはなかなか見えてこない。これが「外にある社会」である。

一方で、我々の頭の中の社会というものがある。よく、「社会の目が怖い」とか「世間が許さない」といった言い方を耳にする。この場合の社会や世間とは、自分自身が深くコミットしている関係、または緩やかな価値を共有しているつながりのことを指す場合が多い。これが、「頭の中にある社会」、言い換えれば「内にある社会」である。これは、近いところでは自分の親や家族。それから育ってきた地域

や学校、あるいは自分にとっても影響を与えた中学校の先生とか、先輩、恋人。いずれもそれらの対象と自分とのつながり方が非常に気になる関係であり、そのつながり方が自分の頭の中にはつきりと描かれている場合が多い。

このように、我々の言う社会とは、外と内にあると捉えられるが、マクロな構造を問題とする政治学や社会学的見地からは、「外の世界」についておもに言及がなされるであろうし、個人と個人とのつながりの部分を重視する心理学的には、「内にある」社会のほうが、意味を持っている。この「内にある」社会を、「シグニフィカント・アザー——意味のある、価値のある他人」と言い換えることも可能である。自分に対してとても影響を与えた、規範を与えた人々、それらが動いている世界が社会ということになる。この前提に立てば、いくら我々が日本人であり、日本の伝統に根ざした習慣などがあって、多くの日本人はそれに影響を受けているといっても、自分の育ってきた家庭の中でそれがあまり意味を持っていなければ、その人にとって社会的意味を持つことにはならない。

また、その人にとって意味を持つ社会と意味を持たない

社会があると考えるが、「自分は何らかの社会の中の1人だ」と言ったときには、そこには意味のあるものもないものの両方がまじっている。外の社会という大きな容れ物の中にある大勢の人の中には、それぞれの「内にある社会」のある部分が重なり合う人も、まったく重なり合わない人もいるからである。個人

SNSやメールを介した現代の「ソーシャル空間」では、自由な交流の中でさまざまな新しい交流価値が生み出されている。

こうした場を上手に活用することが、生活の満足感や自己実現につながる可能性も高い一方、当事者たちに与える心理的影響、危険性についても指摘されている。心理学的アプローチから、これからのソーシャルリテラシーについて考えてみたい。

分断され、薄まりつつある対人コミュニケーション

さて、このように、ミクロな人と人とのつながりの積み

の生き方やパーソナルなものに大きな影響を与え得る「内にある社会」は人によって違っており、当然のことながら、社会認識もずれるのが当たり前である。これを、法律などのいろいろな約束事や、マスコミを通じて広まるような非常に緩やかな広い意味での価値観、そして何より、個人間のコミュニケーションで無理やりつなげているのではないだろうか。人は互いに、個人の頭の中にある社会観のずれや差を埋め、共有できる感覚や知識の共通項を増やすためにコミュニケーションを行い、その結果として、「外にある、構造を持つ

上げの結果として、マクロな社会ができていく以上は、対人コミュニケーションの現状と課題について述べねばならない。現在、社会における人と人とのつながり方は、どんどん二極化してきているようである。決して収束に向いているように見えない。

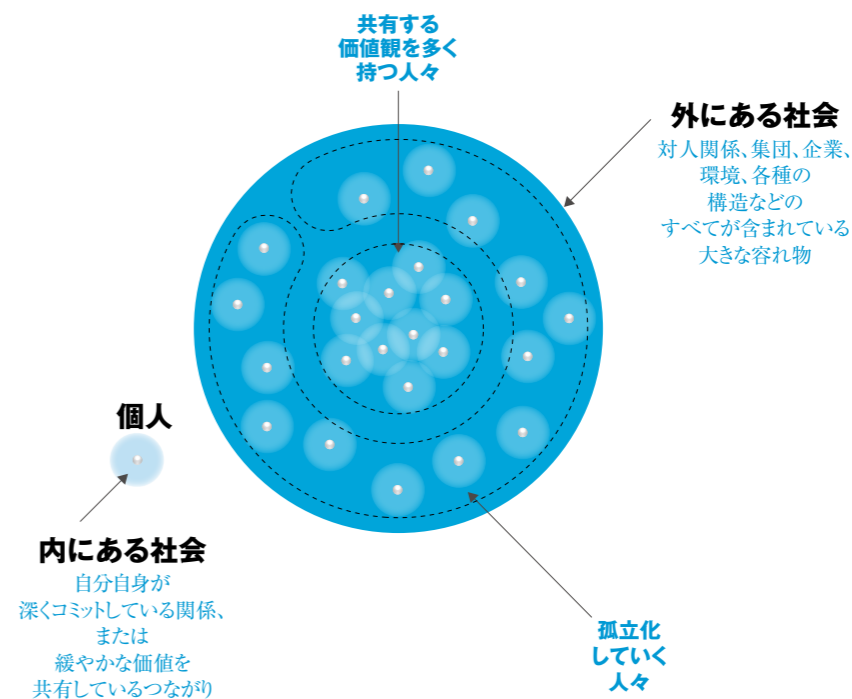
一方に、仙人のように、たとえ町の中においても全然人づきあいをしない人がいて、他方には、たくさんの人とつながりを持ちながらいろいろな活動をしている人がいる。この二者では、社会の持つ重みが全然違う。前者の人には社会はほとんど意味を持たないが、後者の人は、ちょっとしたことでも大きな影響を与え合うような、密度の高い社会を持っている。こうした人たちは、もとのつながりを離れてガラッと違う集団に入ることがないので、5年、10年たってもあまりその規範は変わらず、具体的な人の顔ぶれが少し変わったとしても、その人が持っている社会的な認識観というものが長く続いていく。そういう人たちはおそらく、次の世代、その次の世代にもつながっていくようなものを生み出す可能性が高いのではないだろうか。

それでは、前者の「人とのつながりを持たない人」がなぜ増えてきたのか。おそらくその背景には、第二次大戦後頃から、「個人」や「我」、「私」、あるいは「私らしさ」が追求されはじめたこと、そして、人と違うことが自分らしさだという、個性という言葉に対する誤解がもたらされたことがあるのではと考えている。

昔は、何らかの人生のパターン、モデルを提示する人がいたが、戦後になり、学校教師も親も、「おまえの人生、おまえで考えろ。みんなそれぞれ、自分の生き方だよ」と言うようになった。しかし、どうやってそれぞれの可能性を発揮していったらいいのか、どうしたらやり方を探せるか、という指導や教育がない。そのため、自分ひとりで悩み、右往左往し、自分らしさということを誤解して、とにかく人と違うことをやってみる。やってみても、似たような



二極化する人とのつながり方



世界でもっと頑張っている人がいると自信喪失になり、人とのつながりも持ちにくい人が増えたのではないだろうか。我々が例えば10のパーツを持っていたとすると、1から9までは一緒に10番目が違っているだけでもまったく別な人間になれること、無数の生き方があるということ、無理解できず、無理をして、人と共有できるようなことをすべて拒否してしまうことが、つながりを切る方向に向かわせているともいえる。

情報機器の進歩による影響

こうしたコミュニケーションのあり方の変化は、当然、情報通信機器の発展と切り離して考えることはできない。

面と向かい合っている生面とのコミュニケーションを放っておいて、間接的なネット経由のほうを優先する人が多く見受けられる。ところが、ネットは間接的なコミュニケーションなのでお互いの表情もわからず、テキストメールだったら、文字しか情報がない。目の前の生身の相手であれば、言葉、表情、身振り手振り、視線……非常に情報が多く、大量のエネルギーをお互いに注がないとコミュニケーションができないのに、それを中

途半端にしたまま、間接的なコミュニケーションのほうを優先的に行っているのは、一見、自分で情報をコントロールしているつもりでも、実は断片的な情報に支配されている、非常に中途半端な形といえる。

それから、ネット上のアドレスブックに、何百人ものストックがあったとしても、そのほとんどとは深い交流はないはずである。いざ連絡しようと思えばできる人間がいることだけで安心し、顔が見えない、なりすましさえも可能な相手をむやみに信じている人が増えたのではないだろうか。基本的な人との信頼関係そのものが、積み上げの人間関係への信頼ではなく、一種の情報への信頼へと変質しているのだろう。Facebookで、「いいね」の数を競い、「いいね！」が多いことが一種のネット・マネーやマイレージのように評価されている風潮も同様で、浅い関係をたくさん持っているに過ぎない。

こうした、浅いつながりの形が増えることで、先に述べた二極化する人づきあいのうち、孤立化するパターンの増加につながる懸念があるのである。

ところで、2004年、長崎県佐世保市で小学6年の女兒が学校内で友人をカッターナイフで殺傷した事件がある。これは、ネット上の書き込みを根に持ったことも原因のひとつと言われるが、ネット上の断片的な言葉を拡大解釈しネガティブな意味に受け取るといった傾向は、そもそも、人間の心理がネガティブなことに対してはポジティブなものに對するよりも何倍も敏感だという原理に根ざしている。人間誰しも、自分が傷ついたり、嫌なことをされるのは避けたい。だから、それを排除し、自分を守るために、まず相手の言葉を否定的に捉えておいて、防衛しようとする。このやりとりがどんどん悪循環をして、炎上という現象が起るのである。同じ言葉を発している、対面の会話では目尻が下がってにこにこしているのと、目を三角にしているのでは全然結果が違うが、ネット上の言葉は、表情も何も持たない。言葉だけがすべてなので、ある意味で危険

コミュニケーション・トレーニング
——社会の持つ役割

コミュニケーションというものは、ステップを経て身につけるスキルであり、本当は子供のうちに遊びを通して身につけておくべきものである。身振り手振りも含めていろいろな種類のコミュニケーションがあるのに、現代人は、ネットの普及を大きな契機として、文字とそれを入力する指の動き程度しか能力を使えなくなりつつあるのではないだろうか。

人間関係が、コミュニケーション・スキルのアップとともに徐々に築かれていくものである以上、この能力低下は大きな問題である。本来できたはずの対人コミュニケーションの能力低下に、なんとか歯止めをかける方法はないのか。

近年、コミュニケーションの基本をもう1回考え、その能力を回復する必要があるということから、「コミュニケーション・トレーニング」等と呼ばれる試みが徐々に行われるようになってきている。一般社会人や大学生、まだそう多くはないが小・中学校でも、能力を取り戻すための実践として導入されつつある。

例えば、社会人を対象としたものに、2人組にして視線の使い方を自覚させるというプログラムがある。「最近のあなたの楽しかったことを相手の方にお話しして聞かせてください、そのときに相手の顔をなるべく見ないでください。それから、最近つらかったことを相手の顔を見ながら話してください」というふうに指示する。すると、目を伏せて楽しかったことを話していると、だんだん楽しくない方向に話が進んだり、逆に楽しいことだと思おうと、つい相手を見てしまう。

このように、言葉と視線がいかに連動しているかを学ぶ

現状維持ではなく
変革へ

最後に、サステナビリティ (sustainability, 持続可能性) という言葉にも言及しておきたい。心理学では、この言葉には、自然環境と人との共生、人間同士の関係も含めて、こうしたものを大きく環境と捉え、それらがこれ以上失われないうちに、最低限保護するという意味が込められている。これ以上の崩壊を食い止めるための非常に緩やかな発想としてのサステナビリティである。

しかし、今あるものを保つだけでは一種の現状肯定に陥りがちである。私は、その先にもっと大きな変革、「増やすこと」も必要だと考えている。自然環境に例えれば、場合によっては今ある都会を潰して、そこに新たに100年後の緑の山をつくるようなことも辞さない、といったある程度の力業が必要だと思える。

現在、非常に分断された人間関係が多くなっているが、人の心を結ぶ豊かなつながりを今以上に失わないように働きかけることは、今ならば、やろうと思えばできる。さらに、薄い関係を減らして、もっと密度の濃い人間関係を、ある意味でつくっていかねばならないだろう。そういった変革を与えなければ、サステナビリティといっても、薄くなった現状しか残らないことになる。

そのため、社会がなすべきことというのは、非常にはっきりしている。「内なる社会」と「構造を持つ外の社会」。その2つが影響し合い、人々がそれぞれの well-being を実現できる、幸福を追求できる社会のために、先に述べたようなスキルアップのためのトレーニングや、個人の「内なる社会」を、人とたくさん重ねていけるような場をいかにしてつくれるかが、今後の重要な課題となるはずである。